

平成三十年度入学試験問題

国 語

(教員養成課程)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないこと。
- 2 問題冊子は表紙を含めて七ページです。
- 3 解答用紙は五枚、下書き用紙は二枚あります。
- 4 解答は指定された解答用紙に記入すること。
- 5 受験番号は解答用紙の指定欄に横書きで記入すること。
- 6 解答は縦書きとし、指定された字数にまとめること。
- 7 解答用紙のみを提出し、問題冊子・下書き用紙は試験終了後、持ち帰ること。なお、いかなる理由があっても、解答用紙以外(下書き用紙など)は受理しません。
- 8 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて監督者に知らせること。

問題 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

単語レベルの暗記は、無味乾燥であり、学ぶ方も徒労感が伴う。しかし、和歌や文章単位の暗誦^{あんじゅう}は、共同の記憶を言説レベルでチクセキ^aする最も有効な方法であったし、今もそのはずである。

小学校などで子どもに作文を書かせる場合、私自身も経験したが、「思っていることを自由に書きなさい」と教師が指導することが多い。しかし、思っていることと言えは、たとえば、遠足などの行事が「面白かった」か「つまらなかった」くらいしか浮かばないのが普通の子どもの感性であり、それ以上に、ある事象をどのように表現していくかとなると、どう書いてよいか分からなくて、大半の子どもは書くや否や即座に足踏みしてしまうのである。豊富な読書体験に加えて、頭の中になんらかのお手本がないと思うことも自由に書けない、という厳然たる逆説を、どうやら、教師、文科省の官僚、教育者たちの大半は分かっていないようだ。

^{*2}丸谷才一^{*3}氏が吉田健一^bのイツワとして伝えていたが、イギリスのパブリックスクールでは、「国語」の授業は、長詩^{*5}(ミルトンなどだろう)の暗誦に大部分の時間が割かれていた。丸谷氏が日本ではそうでない^たと質したところ、吉田は「それでは、国語の時間では何をやっているのか」と答えたそうだ。

暗誦^cにカ^cラ^cンで忘れられないのが、マリリン・モンロー主演の喜劇『バス停留所』(一九五六年)に登場するカウボーイである。彼は、モンロー演ずるシエリーを「チエリー」と発音することからも分かるように、無知な田舎者だが、うぶであるために適切な愛の言葉が思いつかない。やつのことで思いついたのが、小学校時代に暗誦させられたリンカーンの『ゲティスバーグの演説』をシエリーに語りかけることだった。朝方、まだ深い眠りの中にあるシエリーの部屋で電話が鳴り、突如、「八七年前、われわれの父祖たちは、自由の精神にはぐくまれ、すべての人は平等につくられているという信条にさざげられた、新しい国家を、この大陸に打ち建てた」で始まる演説を寝惚^{ねぼ}け頭で聞かされたシエリーは、アキラめ^dと拒絶と怒りが合体したかのようなけだるい反応で暗誦に応じたのであった。

とはいえ、このシーンから、ピント外れの愛の言葉と男の真摯な態度とが両立していた点にまだ健全さが残っていたアメリカが垣間見えたものである。少なくとも、ここにはそこはかとなないユーモアが漂っていただけではなく、カウボーイにとって、きちんとした文章、即ち、公的言説は『ゲティスバーグの演説』しかなかったたのであり、そのことがシエリーに対する愛情が真剣であることを保証していたからだ。観客もこのカウボーイを馬鹿にしきれなかったに違いない。こうした懐かしさを伴うズレやパロディは今の教育からは決して生まれてこないだろう。

それでは、日本の前近代では、暗誦・暗記はいかに捉えられていたのか。鎌倉時代中期に編まれた『古今著聞集』には興味ぶかい話が載っている。

今日で言えば大学に当る勸学院の学生たちが酒宴を開くことになった。席次は、年齢に関わらず学問の達成順に定められたまではよかったが、宴席が始まると、惟宗隆頼が一等上席に坐ったのである。傍輩どもが「どうしてこの席につくのか」と疑義を呈すと、隆頼は「『文選』三十卷・四声の『切韻』」^{*6}暗誦の者あらば、すみやかに隆頼みくだるべし」と答えて、皆を黙らせたという(巻四・文学)。^②

惟宗氏は代々明法家の家柄だったが、隆頼にとつて古典とは漢籍であつた。膨大な『文選』のみならず、漢詩を作る際に必要な漢字の平仄(四声)・韻を載せた『切韻』を全文暗誦できるといふのは、たいした学識である。日本語には存在しない中国語の平仄を覚えることは、漢詩を作ること以外では一切役に立たないので、甚だしい苦痛を伴う行為であるからだ。隆頼が「無双の才人」として、勸学院の学頭になったのも頷ける。日本最大の漢詩人であつた菅原道真も同様の学識をもつていたに違いない。それは、スペイン地方出身ながらギリシャ語に堪能だつたローマ皇帝ハドリアヌスも同じである。彼らは、暗誦した古典と語学力によつて、今と昔を行き来し、古典という普遍を前提として、そこから新たな創造も企てていたので。なかにはパロディに勤しんだ人もいただろう。

他方、古典の核をなしていた和歌に関しては、暗誦に纏わる話とは欠かないが、『古今集』から『新古今集』に至る八代集から一八〇〇首の秀歌を抜き出して、『定家八代抄』を編んだ藤原定家は、奥書で、幾分の謙辞と弁解を含みながら以下のように記している。

僅かなる覚悟に随ひて此歌を書き連ぬ。古へより以来、人口に在る古賢の秀歌等は自然に忘却して書かず。只、愚鈍之性にて暗誦するところを注するのみ。

A。更に用捨の誘有るべから

約九五〇〇首にもなる八代集を「覚悟」(記憶のことである)によつて抜書したと定家は言っている。むろん、定家とても「忘却」するのであるが、それでも、「暗誦」していた歌を「注」したとある。最近の研究では、忘却に備えるために『五代簡要』をその前に作つており、それを増補・改変したこと、さらに、『五代簡要』と『定家八代抄』の関係も解明されてきた(今井明「忘却と暗誦そして忽忘」)。そのあたりの複雑な事情はともかく、歌壇におけるケネイを支えるとともに、詠作上の「実務的用途」からも定家が「八代集を記憶・暗誦する必要があつた」(同上)ことは明らかだろう。

時代は下つて、江戸時代の後水尾院は、二十一代集(約三三七四〇首)が頭に入つていたと言われている(上野洋三「近世宮廷の和歌訓練『万治御点』を讀む」)。定家・後水尾院兩人共に「忘却」・「忽忘」がままあつただろうが、それにしてもとつてもない記憶力ではある。しかも、それらの記憶は、単に貯えられた、死んだ記憶ではなかつた。彼らを含めた和歌の達人たちは、自らの実作や他人が詠んだ和歌の添削に際して、その膨大な記憶を縦横無尽に働かせて、昔(古歌)と今(実作)を繋ぐ創造行為を實踐していたのである。

今詠む歌は新たな創造である。しかし、歌を語彙レベルで構成する詞、歌が描こうとする世界・趣向である心、歌全体から醸し出される雰囲気や情趣を意味する姿は、理想的には「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め」(定家『近代秀歌』)であつても、大旨は共同の記憶として古歌群のあるべき再現前であつた。それは、無からの創造ではないけれども、伝統を踏まえた創造だつたのである。そろそろ、無からの創造なる近代的妄想を尊ぶことをやめてはどうだろうか、そんな創造など実際には存在しないのだから。

そして、見落とせないのが、和歌の達人たちは漫然と古歌を暗誦・記憶していったのではない、ということである。後水尾院は廃れ消えゆく和歌伝統を守り、再び興隆させたいという一心で和歌に打ち込んだのだ(上野前掲書・保田與重郎『後鳥羽院』)。伝統が自然にかつ無作為でも守られる、といった観念は後水尾院にはなかつた。平安後期に「あはれなるかなや、この道の目の前に失せぬる事を」(『俊頼髓脳』)と、和歌の道の衰退を歎いた源頼朝の決意も同様であつた。伝統は、それを守ろうとする少数の人間の主体的意志と実践によつて辛うじて守られるのである。

彼らにとつて、暗誦するものは漢籍であれ、和歌であれ、古典しかなかつた。古典が作り出す(日本)、言いかえれば、古典日本に彼らは依拠し、そこから何かを作り出していったのだ。古典日本を植え付ける装置として、暗誦があつたのだ。

とはいえ、暗誦が必ずしも常に肯定的にだけ捉えられていたわけではない。鎌倉時代の『源氏物語』の注釈書である『光源氏物語抄(異本紫明抄)』には、建長五年(一二五三)三月に鎌倉で開かれた「源氏談議」を記している。その席であくまで自説に拘つた西田法師のことを『光源氏物語抄』の編者(藤原時朝といわれる)はこのように批判している。

凡そ其れ人の性、分くるに四種有り。一は料知・^{*14}暗誦、其れ以て兼備す。二は暗誦の徳無しと雖も、了知の性有り。三は了知の性を知ること無しと雖も、暗誦有り。四は料知・暗誦共に^か関く。今、播公(西田)においては、所謂第三の暗誦の徳有るも了知の性無きに似たる也。且つ^た童^ただ是れ^のみに非ず、先々も^{ひがれ}僻料簡多し。其の事の故也。

編者は人間の性を四種に分ける。了知・暗誦兼備型▽了知優位型▽暗誦優位型▽了知・暗誦不備型の四種である。西田は、暗誦はあるが、了知がないとされているから、三番目に位置し、故に「僻料簡」(間違つた見解)が多いとされるのだ。この場合の「了知」とは、論理的認識能力のことだろう。『源氏物語』のような散文を読解するには、必須の能力である。西田は、歌はよく覚えていたが、文章を読解する能力に欠けていたのである。

だが、了知・暗誦具備が最上とされているように、最低限の暗誦がなくては、了知も働かないことは、編者にも諒解済みだつたらう。だから、暗誦

優位型よりも知優位型が上位に置かれているからといって、論理的認識能力が暗誦よりも断然すぐれていると受け取るのは問題である。すべての前提には暗誦があり、その上で了知が働くことが求められているのだ。これは、暗誦を捨て去った現代にも通ずる見識ではなかるうか。

(前田雅之『古典的思考』、笠間書院、二〇一一年刊による。一部改変。)

注 *1 文科省……文部科学省。

*2 丸谷才一……一九二五～二〇一二。英文学者・小説家・評論家。

*3 吉田健一……一九二二～一九七七。英文学者・小説家・評論家。

*4 パブリックスクール……イギリスで伝統のある、寄宿制の私立中高一貫校。

*5 ミルトン……一六〇八～一六七四。イギリスの詩人。

*6 『文選』……中国の南朝梁代に編まれた詩文集。蕭統編。

*7 四声……漢字の音の四種の声調。この四種の声調を大きく平声と仄声に二分類したものを平仄という。

*8 『切韻』……中国の隋代に編まれた発音の字典。陸法言ほか編。

*9 明法家……法律に関する学問を代々伝えた家系、またその家系の人。

*10 学頭……勸学院の学生の代表格である者。学生の中から学識に優れた者を選抜した。

*11 『五代簡要』……鎌倉時代前期の歌学書。藤原定家が『万葉集』『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』から歌句や和歌を抜

き出したもの。

*12 暗誦……「暗誦」に同じ。

*13 『俊頼髓脳』……平安時代後期の歌学書。源俊頼著。

*14 了知……「了知」に同じ。

問一 二重傍線部 a s e のカタカナを漢字にしなさい。(二〇点)

問二 傍線部①に「ピント外れの愛の言葉と男の真摯な態度とが両立していた」とありますが、筆者は、なぜ「ピント外れの愛の言葉」と「男の真摯な態度」
とが「両立」していたと述べているのですか。七〇字以上八〇字以内で説明しなさい。(二〇点)

問三 傍線部②の「暗誦の者あらば、すみやかに隆頼るくだるべし」を、現代語に訳しなさい。(一〇点)

問四 傍線部③の「ローマ皇帝ハドリアヌス」と傍線部⑤の「後水尾院」は、どのような点が共通していますか。三〇字以上四〇字以内で説明しなさい。
(一五点)

問五 傍線部④の「書き連ぬ」の「ぬ」について、次の例にならって、文法的に説明しなさい。(一〇点)

(例) 僅かなる覚悟 　　ナリ活用の形容動詞「僅かなり」の連体形活用語尾
書かず。 　　打消の助動詞「ず」の終止形

問六 空欄 A を含む「奥書」は漢文で書かれており、筆者はそれを書き下し文にしています。 A に入る「況於中古以後乎」の書き下し文
を書きなさい。また、必要な語句を補いながら現代語に訳しなさい。(二〇点)

問七 傍線部⑥の「源俊頼」は、「思ひ草葉末に結ぶ白露のたまたま来ては手にもかからず」という恋の歌を詠んでいます。この歌には、いくつかの表現技
法が用いられています。いずれか一つの表現技法について、この歌の言葉を引用しながら説明しなさい。(一〇点)

問八 傍線部⑦の「源氏物語」について、次の語をすべて用いて、八〇字以上九〇字以内で説明しなさい。(二〇点)

歌物語 　　作り物語 　　紫式部

問九 筆者は、文章全体を通して「暗誦」をどのようなものだと述べていますか。四〇字以上五〇字以内で説明しなさい。(二五点)

問十 古典を暗誦することについて、あなたはどのように考えますか。国語の学習の経験を具体的に挙げながら、二五〇字以上三〇〇字以内で述べなさい。(五〇点)